

## 幕末明治の写真師列伝 第五回 下岡蓮杖 その四

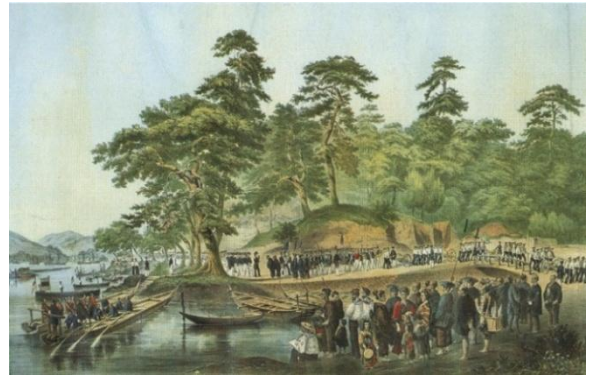
『写真事歴』によれば、このペリー来航の騒ぎに、久之助はかつての師、狩野董川の一族を津久井へ避難させようと考え、そのことを師に提案するために江戸へ行っている。この提案は董川も大いに喜び、久之助にその費用として十両を与えている。この津久井には久之助の親族がいたと考えられるが、詳細はよく判らない。

ところが、久之助は江戸から再び浦賀に戻ると、しばらく様子を見ることにした。すると幕府は米国の圧力に屈して、和親条約を結び、このことに満足したペリー艦隊は米国へ帰国する。こうして浦賀もまた平穏な日々に戻るようになったのだが、結局、久之助は写真術を学ぶことはできずにいた。

久之助はどうしても外国人から写真術を学びたいと考えていた。そこで久之助が考えたことは、和親条約によって下田が開港することになったことから、自分の故郷でもある下田に戻って、次の機会を狙おうということだった。久之助は浦賀で下田行きの船便を求めると、折よく下田行きの船も見つかり、その船に乗って下田に行くことにした。

ところが、久之助が船に乗って下田に向かう途上の、ちょうどその時、大地震が起きる。安政元年 11 月 4 日（1854 年 12 月 23 日）、駿河湾から遠州灘、紀伊半島南東沖一帯を震源とする M8.4 という巨大地震が発生したのだ。後の世に言う「安政の大地震」である。

これにより、久之助の乗った船も急遽、小網代港に避難することになった。津波による被害であろうか、小網代港内の船は覆没、散在し、港内の家屋も流失して、その惨状は目も当てられない状態であった。久之助は小網代港で下船すると、自身の無事を祝って、またこの大地震の被害にあった人々の冥福を祈



ペリー提督一行、下田へ上陸の図 安政元年(1854)  
(日本カメラ博物館所蔵)

るために、この地の嶽山不動に詣でている。この嶽山不動とは、現在の荒井山潮音寺真光院（三浦市三崎町小網代 536）にある三浦不動尊のことである。

この帰途、久之助は「三浦荒次郎の碑」も訪れ、近くの農家では、辞世の句も見せて貰っている。「三浦荒次郎の碑」とは、三浦氏最後の当主道寸義同（どうすんよしあつ）の子、荒次郎義意（あらじろうよしもと）の墓のことである。この墓は現在も油壺マリンパークの入口近くにあるが、所有者により無断立入、撮影禁止とされている。

久之助は小網代港に浦賀に向かうという船もいたので、自分が無事であることの父・与惣右衛門宛の手紙を託している。こうして、久之助は翌日、再び船に乗ると小網代港を出港して、順調に旅を続け、下田の大浦港に到着した。

しかし、この大浦も大地震の被害で相当のものだった。下田も津波のため家屋はことごとく流失して、大勢の人々が亡くなったという。久之助は舟子たち数人と一っしょに、すぐに下田の町へ向かうことにした。

（森重和雄）